

学の知識があれば、それらはもっと意義深く価値ある宝に見えるのであろうが、猫に小判で单なるめずらしい物体としてしか意識に残らないのがはなはだ残念であった。

息子らは、壁一杯に描かれた浦幌發祥当時の住居跡に、豆電球をつけたり消したりして遊んでいたが、何を感じたことやら。

1階は、2階とは趣きが異り、浦幌開拓の汗と涙の苦闘の跡が再現されている。炎がゆらめいているような炉ばたの照明に感心しながら、テレビ小説の「アンラコロの唄」や「お登勢」等にみる北海道開拓の絶望的な苦悩、その中にわずかな光明を見出して必死に生きた先人の魂の叫びのようなものが聞こえてくるようである。と感じの私も私がこよなく北海道を愛し、浦幌を愛しているからであって、郷土の歴史的遺産に誇りを持っていられるのであろう。(なんて誇大、又は過大評価かしら?)

外に出ると、青少年会館に学童保育の子等の元気な姿があり、眼下には、とりどりの屋根の連なりの中に息づく浦幌町民の活気があった。足元からはいあがってくるような爽快さに、思わずあたりを見まわすと、10月完成の東山森林公園が、すでにほとんど造成が終り、人工と自然の美が調和されたおだやかなたたずまいをみせている。野球

場、町民プールの他に、いまや子供達の人気の的となった全長82mの吊橋や、23,493m<sup>2</sup>もある中央広場、変化に富んだ楽しい林間歩道、ひょうたん池、スペリ台、エキゾチックな赤い屋根の公園の家などが木の間がくれに見える。

心が洗われるようなすがすがしい空間の広がりの頂点にある博物館は、青少年会館と共に森林公园の拠点なのであろう。自然環境としては申しぶんなさそうであるが、帰りしな、ふっとふりかえって博物館をみると、晚秋のたそがれのせいか、かすかに孤独の影がみえるような気がした。それは、あまり訪れる人もなく鍵のかかった扉の中でひっそりと昔話しあわしているであろう文化財の、淋しい心のようであった。

はじめに書いたように、私は自から興味を抱いて博物館を訪れたわけではない。それが、わずかの時間かいま見ただけで、もう一度行ってあの扉を開けてやりたいような、いとしさ、なつかしさにとらわれる。不思議なことである。それだけあの貴重な人類の遺産が私の心をとらえたからなのであろう。中央公民館の一角に博物館コーナーを設けたり、移動博物館などの考慮もあれば、もっと町民に親しまれるであろうし、文化財の輝きも増すような気がする。 (浦幌町在住主婦)

## 浦幌町3頭目のデスマスチルス化石発見

木村方一・佐藤芳雄・後藤秀彦\*\*\*

### ▼北海道で発見されたデスマスチルス

北海道でこの動物の化石が最初に発見されたのはたいへん古く、大正の初期である。最初に発見されたこの化石について記録報告されたのは1914年(大正3年)で、東京帝国大学の徳永重康・岩崎重三の両氏による。その化石は、渡島半島今金町のマンガン鉱山から発見された。両氏は、この化石は北アメリカ大陸太平洋岸地域で発見され、報告されているデスマスチルスの臼歯であるが、これまでのものとは形の違った新しいタイプであるとして『Desmostylus japonicus Tokunaga et Iwasaki』(ニッポンデスマスチルス)と命名した(Tokunaga and Iwasaki, 1914)。

昭和になって、瀬棚町や東瀬棚村(現北桧山町)のマンガン鉱山で、2個目、3個目の発見が続いた。

1936年(昭和11年)10月、日高山脈を越えた道東の浦幌町でもデスマスチルスの臼歯が発見されたのである。発見された場所は、太平洋に面した浦幌町厚内と昆布刈石の中ほどで、太平洋に流れる小さな川のオコッペ沢である。この沢の上流で、上厚内駅から南に3km下った地点の河床で、転石として発見された。発見者は、木村某氏であった。この化石は、北海道帝国大学の長尾巧氏のもとに届けられた。この化石は、6本の柱を束ねたようなもので、確かにデスマスチルスの臼歯であった

(第1図)。しかし、それは道南地方で発見されたものに比べ、全体の形が小さく、咬柱のわん曲などから別のタイプのものであった。

長尾氏(1937)は、当時の日本領土、樺太で発見し命名していた*Desmostylus minor* Nagao (デスマスチルス・ミノール) に似たタイプとして報告した。

デスマスチルスの発見は、1937年(昭和12年)に太櫛村(現北桧山町)の小川鉱山で発見されたのを最後に、昭和30年頃までストップしてしまった。

これは、昭和10年代後半の太平洋戦争と昭和20年からの戦後の混乱期にあって、人々は生きることに精いっぱいで、化石どころではなかったのであろう。20年代の終り、社会もやや落ちつきを取



第1図 オコッペ沢標本の写真

りもどし、再び化石が発見されました。

最初は、昭和28年、石炭増産政策の最中、雨龍郡雨龍炭鉱の坑道で現場係員の和田達氏によって発見された(藤井、1953)。続いて34年鉱物資源調査中の土居繁雄氏(北海道地下資源調査所)によって、北桧山町初音マンガン鉱山で発見された。そして北見市相の内での発見へと続いた。北見地方の教師達が、子供達に生きた教育をしよう。そのため郷土の地史を研究しようと研究会を組織して化石採集会を開いた。その時、地層の中から貝化石と一緒に数本の変なものが発見された。発見者は、この会に参加していた中学生の加藤善司君であった。その時、講師として参加していた北海道大学松井愈氏は、その柱状のものを組み合せ、浦幌町オコッペ沢のデスマスチルス臼歯と同じものであると判定した。このようにして戦後のデス

モスチルス化石発見が始まった。

その後、阿寒町(岡崎、1972)、歌登町(秋山・熊野、1973)と全道的に発見地域が広がっていった。そして、1965年5月、上厚内の厚内川河床から浦幌町で2個目のデスマスチルスの臼歯が発見された。発見者は、木村定吉氏であった。1976年、この化石が専門家の目にとまり、その種は、*Desmostylus Japonicus* であることが確認された(犬塚ほか、1976・1977)。この発見に端を発し、本別町でも発見され、足寄町では地質調査中の北大大学院生(木村学氏)によってほぼ1頭分が地層の中に包含されて発見された。そして1977年5月、浦幌町で3頭目、北海道内21頭目のデスマスチルスの化石が発見されたのである。この標本を発見地点の地名をとって「合流標本」と呼ぶことにする。

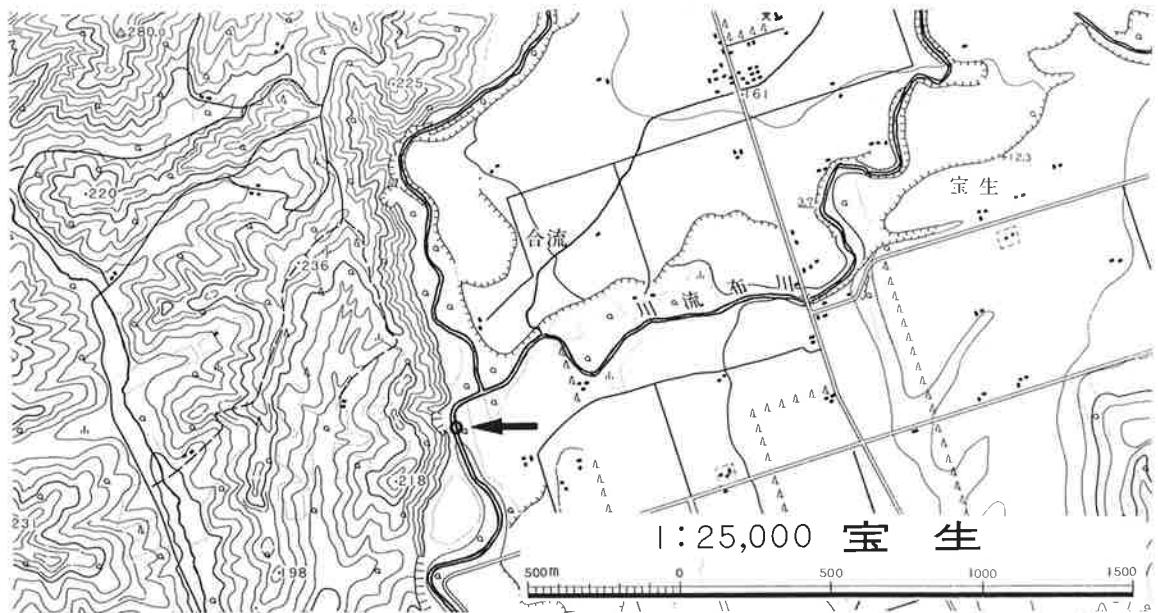
### ▼三頭目発見のいきさつ

3頭目のデスマスチルス化石は、1977年5月28日浦幌町字相川で農業を営む北原甲子生氏によって発見された。北原家では毎年家族慰安の一環として川狩りを行っていたが、本年も浦幌川で次男修君とともに浦幌川と川流布川との合流点付近から川下に向って川狩をしたところ、300m程下流の中州の砂利の中に幼児のこぶし大の光沢のある石を発見したのである。同氏は、付近の転石と比較してみたが材質・形態・色調があまりにも異なるため、数日後浦幌町教育委員会の筆者らに持参したものである。筆者らは、その石が柱を束ねたような化石であったので、明らかにデスマスチルスの臼歯化石であると判断し、北海道遠軽高校教諭大槻日出男氏に通報したものである。

筆者らは、同氏に発見のいきさつ及び発見地点



第2図 化石の発見地



第3図 化石発見地点の位置図 (Mark: ○)

の状況を詳しく聞くとともに、同年10月19日現地を踏査した。

発見地点は、浦幌川と川流布川の合流点から300m下流の浦幌町字合流である。(第3図)同地点は、浦幌川の本流で右岸は低平な丘陵が川に向ってなだらかに落ちこみ、左岸は浦幌川の氾濫による沖積地となっている。(第2図)

なお、発見者の北原氏は本化石の重要さを認識され、研究資料として浦幌町郷土博物館に寄贈された。これにより、同館のデスマスチルス臼歯化石は、先に発見された上厚内資料とともに2個となつた。

#### ▼化石発見地点周辺の地質

化石発見地点は、前記のように浦幌川と川流布川の合流点(第3図)で転石として発見された。このことから、浦幌川本流が運搬したとも川流布川が運んできたとも考えられる。この2本の川の流域の地質は5万分の1図幅(三谷ほか、1959)によると第4図のように示される。図の中に破線で両河川の流域範囲を示した。

流域の東部の広い面積をしめる記号A地域の地層は、中生代白亜紀後期から新生代古第三紀初期の暁新世のころまでに、現在のオホーツク海や太平洋側にあった陸地から運搬されて海域に堆積し

た地層である。これらの地層を根室層群という。

根室層群の下部層は、現在根室から厚岸付近で見られ、爬虫類の恐竜や、頭足類のアンモナイトなどが生きた時代の地層である。第4図に分布する根室層群は、上部層にあたり、暁新世の地層と考えられている。新生代の始新世の頃(表1)になると、根室層群を堆積させた地向斜地帯は隆起をし、大陸の一部となった。そして古第三紀の終り、漸新世になると、現在の釧路平野の地域が沈降をはじめ内湾を形成した。一方北海道の中央部の日高山脈を含んだ広い地域の沈降地域は北のサハリン方向へと続いた。大陸地域は隆起運動を起し、浸食を受け、海域に土砂を堆積させた。沈降と隆起は、地域を移動させながら中新世末期まで続いた。この時代こそデスマスチルスが北太平洋の沿岸に生息した時代であった。この時代に形成された地層の分布地域を第4図で見ると、記号B・Cがその地層の分布地域を示している。

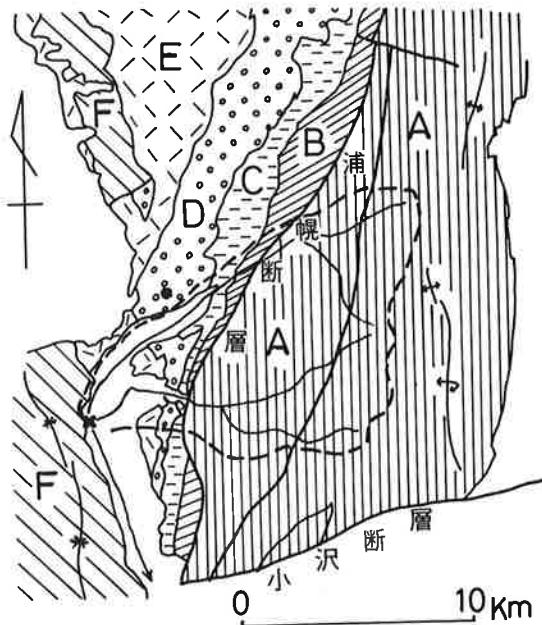
A地域は当時の島の一部で、この島の西海岸線に沿ってB・Cの地層を堆積していた。この海岸地域で生息していたデスマスチルスの遺体が、海底の地層中に化石となって残ったのであろう。

E・F層も2河川の流域範囲に分布するが、その地層から産出した可能性は少ないと考えられる。E層は、足寄層と呼ばれる陸成火山堆積物からな

相対年代	地層	環境	地殻変動	図2の記号
第四紀				
新鮮世	池田層・足寄層	隆起運動で陸化 池田・本別は湖の中	↑	F E
新第三紀	本別層	西城は沈降し地層の形成	↓	D
中新世	川上層群 貴老路層・仁生層・本別沢層	激しい隆起運動 沈降運動が進み十勝太から北見方向に島ができ、その周辺でデスマスチルスが生息した。	↑ ↓	C
古第三紀	音別層群・奥本別層 浦幌層群(縫別累層)			B
始新世		隆起運動で大陸の一部になった。	↑	
晚新世				
中生代	根室層群 川流布累層・活平累層	浦幌地域は海底下にあり、北の陸域から土砂が運搬され地層が形成した。	↓	A
後期白亜紀				

(1/20万 帯広図幅 1970)

表1 浦幌付近の地層と環境のうつりかわり



第4図 化石発見地点付近の地質〔山口ほか(1970)20万分の1図幅「帯広」による〕

×：化石発見地点 .....：流域範囲 ●：本別の化石発見地点

る地層であり、F層は汽水成から淡水成の湿原堆積物からなる泥岩や植物化石層だからである。このことは、すでに十勝の海は陸化していたことを示している（表1）

一方、D層は本別層といわれ、内湾性の貝化石を多数含む海成の砂礫層であり、B・C層が堆積した時代と似た環境が考えられる。第4図で示すように、本別町で発見されたデスマスチルスはD層からの発見と推定されている（木村、1977）。D層は鮮新世の地層である。日本列島ばかりでなく、北太平洋のデスマスチルス化石は中新世の地層から発見される。そのため、デスマスチルスは中新世の示準化石として利用されてきた。この矛盾をどのように説明し、合流標本をどう位置付けるべきであろうか。再び地質の特徴にもどり、C層とD層との関係を考えてみる。

C地域の川上層群最上部の貴老路層とD地域の十勝層群最下部の本別層とは斜交不整合で、その斜交角度は30°～60°と大きい。又、本別層の礫の岩石種を見ると、貴老路層・仁生層・本別沢層を作る頁岩・泥岩・凝灰岩・砂岩と同質のものであった。このことから、川上層群を堆積させた海域は、地殻運動を起こして隆越し、浸食されて礫として新しい海域に運ばれ、本別層のレキ岩砂岩層を形成したと考えられている。（三谷ほか、1959）浦幌川、川流布川の両河川流域に、B(漸新統)・C(中新統)・D(鮮新統)の各地層がほぼ同じような広がりをもって分布しており、化石の産出した地層と時代を断定することはできない。

#### ▼化石の特徴

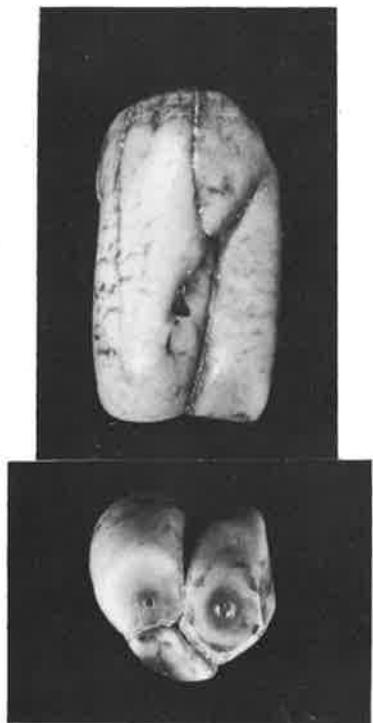
デスマスチルス臼歯の一般的特徴については、浦幌町郷土博物館報告第8号で犬塚則久ほか2氏が記しているので、ここでは省略して今回の合流標本の特徴を見ることにする。

上厚内標本は8本の咬柱をもち、歯根は欠けていたものの、ほぼ1臼歯が残っていた。

合流標本は、3本の咬柱が残存し、歯根は欠けていた。ほぼ完全に保存されていたのは、内2本で、他の1咬柱は柱の長軸方向に割れている。（第5図）又、化石産出地点から発見地点まで河床を運搬されたためか、全体的に円磨され、破壊面の角も丸みをもっていた。セメント質は咬柱間に認められる程度である。

咬柱の配列と咬耗を受けている部分(咬耗部位)の方向、前後の歯の接触で磨耗した面(接磨面)の位置、咬柱のわん曲に着目しながら、上厚内標本(犬塚ほか、1977)、本別標本(木村、1977)、オコッペ標本(NAGAO, 1937)、<sup>カムトクシセツ</sup>上徳志別標本(秋山ほか、1973)、氣屯標本(長尾、1937)と比較検討した結果、上厚内標本に近似していた。しかし、咬柱の傾斜方向が近心側から見て、上厚内標本と対称的に右側に傾斜していた。咬柱のわん曲や、咬耗部位からも本標本は右上顎臼歯第1列目(近心の1列目)の頬側から2本と第2列目の頬側咬柱と考えられる。

以上のように、合流標本は上厚内標本と同じ種

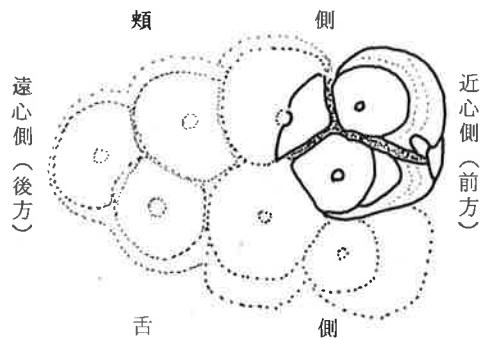
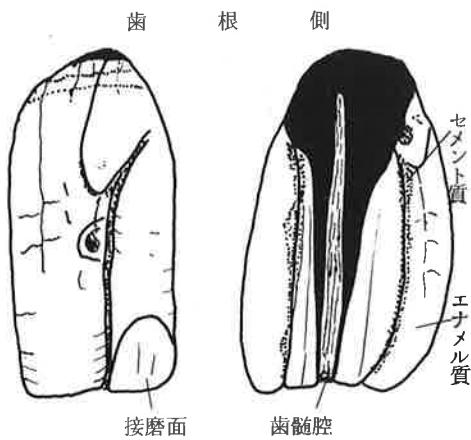


第5図 合流標本(実物大)

の*Desmostylus japonicus*(ニッポンデスマスチルス)であり、右上顎臼歯と考えられる。

又、上厚内標本は、接磨面が近心側の3咬柱にまたがって、咬合面から2分の1にも達しているのに対し、本標本では頬側の咬柱には磨耗のあとではなく、2本目の咬柱のみに見られ、咬合面から4分の1程度に終っている。(第6図)

歯冠の高さ(歯冠高)は上厚内標本では第1列が30mmであるのに対し、本標本は高く43.6mmあつ



第6図 化石実測図(原寸大)

左上：近心面 右上：切断面(遠心側より)  
下：咬合面

た。上顎臼歯第1列の頬側咬柱の最大径を比較すると、上厚内標本16.6mm、合流16.5mm、本別15.0mmで上厚内標本に近似していた。以上のようなことから本標本は、上厚内標本よりも咬耗の初期段階にあったと考えられる。しかし、全体の大きさとしては、上厚内標本に近似し、第1臼歯と考えたい。

このように、上厚内と浦幌町北部地域にも同じ種のデスマスチルスが生息していたことになる。このことから、生息年代を推測すると、上厚内標本は厚内川流域の地質から、中新統の直別累層が広い地域をしめ、上流の一部に漸新統の地層が分布することから中新世のものと考えられるが、漸新世の可能性も残されていた。今回の合流標本の

発見された河川流域は、第4図で見たように白亜系から鮮新統まで各時代の地層が分布したが、地層の広がりと、上厚内標本と考え合せると、漸新統の音別層群（第4図のB）か中新統の川上層群（第4図のC）、又は鮮新統の十勝層群本別層（第4図のD）のいずれからか産出したと考えられる。

#### ▼おわりに

この貴重な化石を発見し、浦幌町郷土博物館に寄贈下さり、広く研究に供された北原甲子生氏に心からお礼申し上げたい。この研究を進めるにあたり、北海道大学秋山雅彦氏には、標本の比較検討にご便宜をいただき、種の鑑定のためにご指導いただいた。北海道大学松井愈氏・東京大学犬塚則久氏には本稿の校閲をいただいた。以上の方々にお礼を申し上げる。本標本は、浦幌町郷土博物館に展示する。（\* 北海道教育大学札幌分校助手  
\*\* 浦幌町教育委員会主事 \*\*\* 浦幌町教育委員会学芸員）

#### 引用文献

- 秋山雅彦・熊野純男（1973）：北海道歌登町上徳志別産デスマスチルス、地質学雑誌第79卷12号、781—786  
犬塚則久・秋山雅彦・大槻日出男（1976）：上厚内で発見されたデスマスチルスの化石、浦幌郷土博物館報告第8号、2—7  
——（1977）：北海道

十勝郡浦幌町上厚内より発見された*Desmostylus*の臼歯、地質学雑誌第83巻第2号、139—141

木村方一（1977）：北海道中川郡本別町付近の螺湾礫岩砂岩層より*Desmostylus*の臼歯発見、地球科学第31巻4号、167—170

三谷勝利ほか（1959）：5万分の1地質図幅「本別」および同説明書、北海道開発庁

長尾 巧（1935）：樺太氣屯産*Desmostylus* : *D. mirabilis* nov.、地質学雑誌第42巻第507号、822—825

NAGAO, T. (1937a) : A New Species *Desmostylus* from Japanese Saghalien and Its Geological Significance, Proc. Imp. Acad. Japan, vol. 13, 46—49

—— (1937b) : A New Occurrence of a Small *Desmostylus* Tooth in Hokkaido, Proc. Imp. Acad. Japan, vol. 13, 110—113

岡崎由夫ほか（1972）：北海道釧路・阿寒町知茶布産のデスマスチルス臼歯について、釧路論集第3号、75—86

Tokunaga S. and Iwasaki C. (1914) : Notes on *Desmostylus Japonicus*, 地質学雑誌 vol. 21, 33

藤井宏惇（1953）：北海道石狩國雨龍郡古河雨龍鑛業所に於ける*Desmostylus*の産出、地質学雑誌第59巻

## 北海道陸別町で発見した4つのチャシ跡

\* 石橋次雄・後藤秀彦 \*\*

昭和52年度の文化財パトロールを実施するにあたり、筆者の一人石橋が陸別町教育委員会に日程等の連絡をしたところ、北海道埋蔵文化財包蔵地一覧表に未登録のチャシ跡が発見されたので、是非それを見てほしいということで、10月14日と11月8日の2回にわたって4基のチャシ跡を踏査し

た。

4基のうち1基については、既に『<sup>りくべつ</sup>達別村史』（岩佐、1938）の「<sup>とらり</sup>登良利部落」の項に「本部落7番地には古戦場チャシあり、この附近より臼井忠平氏は大正5年に鉄兜を発見し同10年にも鎧及び石矢頭、鍋、鉈等の古物をチャシ内より発見し